

第 3 章

今後の課題

1 データの分析課題

(1) 学生単位のデータ分析

本速報版では、分析結果をほとんど示すことをしなかった、学生単位のデータセットに基づく分析を、とりあえず実施しておく必要があるだろう。その際に、いくつかの視点が残されていると思われる。

(a) 学生内変動の大きさ

授業アンケートの評定値は、「学生」という要因よりも、「授業」や「科目」の要因が大きいことが想定され（必ずしもそうではないという実験結果もある）、学生内で、いろいろな科目の評定値の平均値を取ることにどれだけ意味があるのかは微妙なところではないかと思われる。その一つの事例が、図 2-2-2（下）のグラフであって、科目ごとの平均値で見るとそれぞれの学科の特徴が平均値の分布に表れているように見えるのに対して、学生ごとの平均値の分布は特徴が消えてしまっているかのようにも見える。しかし、それにしても、学生の評定値の散らばり方も決して小さいわけではなく、「高い」評定をする学生はおそらく全般的に高く、「低い」評定をする学生は全般的に低く評定するということもあり得ることであろう。そこで、学生番号によって、各科目のアンケートの評定を学生ごとにまとめて、その統計量について分析するというのも重要なプロセスになっていくものと思われる。その中で、授業アンケートへの評定のあり方にいくつかのパターン化などができる面白いと思われる。

例えば、「授業評価」という言い方がされるとき、しばしば問題にされるのが、「学生の授業評価能力」ということである。なお、この点については、「授業アンケート」という立場では、基本的にはそのような「能力」をさほど問題にはしていない。何故なら、「いい加減」な学生は厳然としてクラスに存在するのであり、そういう学生をも、ある教育的枠組みの中では、はじき出すことはできないのであって、教育の対象として考慮していかざるを得ないからである。つまり、そのような学生をいることを知るツールとして、「授業アンケート」は機能し得るということである。

しかし、そうであるなら、どのような学生が「いい加減」なのかということ、それは存外に簡単な話ではない。自分のクラスの学生が、授業アンケートにいい評定をしているからと言って、その学生は教員のお眼鏡にかなった「評価能力」の高い学生ということにはならないかもしれない。ひょっとしたらどの科目にも同じように回答しているかもしれないし、逆に、「いい加減」なのかもしれない。むしろ、今の学生に与えられた環境の中で、率直に、わからないものはわからないと言ってきて、また、学ぶ意味が見出せないならそう言ってくれる学生の方が、よほど真剣なのかもしれない。

いずれにしても、そのようないくつかの授業アンケートへの回答パターンが、その他のどのような要因と関連しているかなどを見ても通して、ある種の「いい加減」な反応パターンというのもあぶり出すことができるかもしれない。もっとも、一つの学期の調査だけでは、平均が 4 科目程度の回答ということもあり、容易に反応パターンなどを

同定できるというものでもないと思われるが、それは学生番号を同時にマークさせていることで、数学期間にわたってその視点で分析できる余地が残されているというあたりに今後の期待をしておくことにしたい。

(b) 成績データとのマージ

授業アンケートはあくまで「意識」レベルの調査であって、授業で獲得した知識や技能などについては、やはり、試験やレポートなどに関わる測定値がより信頼性も妥当性も高い指標となることはいうまでもない。今回行っている授業アンケートでは、そのことも見越して、敢えて学生番号を記入させており、成績データとのマージを行って、最低限、評定項目との相関については分析を行う予定である。その他、上記の学生内の授業アンケートへの反応パターンや、可能であれば、成績のプロフィールやある種の総合指標などとの関連性も分析できればと考えている。

(c) 追跡調査

今回の調査における成績データを含めた、同一学生の指標のマージに加えて、追跡的に、同一学生のアンケート指標、成績指標を積み重ねて、個の分析を深めていくということも有意義であろう。もちろん、追跡調査というのは、はなはだ厄介であって、ほとんど完全なデータセットを入手することは困難であろうが、今後、そのことを常に意識して、授業アンケートに取り組んでいくことが、カリキュラムというより大きな視点からしても望まれていくことであろう。

例えば、専門基礎科目と専門科目との接続の問題なども、単なる学業達成の面のみならず、学習意欲的な側面でも考慮する余地はあると思われる、また、専門基礎科目の同一科目名の授業の平均評定値の差の大きさを見るにつけ、京大の場合に、その差が、専門教育ではほとんど差のない形に解消されているのか、それとも、何らかの差になって残っているのかといった点も検証しておく意義はあるのだろうと思う。

特に、1回生から4回生に至る4年間の授業アンケートを追跡していくという試みは、世界的に見てもそうやられていることではないはずで、少なくとも、京都大学では初めての試みとして、貴重なデータにもなっていくと思われる。

(2) 京大工学部を自己表現するためのデータ分析

「評価」は、「自己表現」のツールでもある。したがって、この「授業アンケート」の結果を工学部として公表する際に、「京都大学工学部」の「教育」の特徴が、社会に対して、わかりやすく伝えられるということが求められることになる。そのためには、どういう項目が必要とされるのか、あるいは、今回利用した項目からどのようなことを抽出して強調していくとよいのか。そういう視点から、授業アンケートの分析を進めていく必要があると思われる。

京大は、言うまでもなく、「自由の学風」という理念を標榜しており、それは、おそらくほとんど全ての京大人が強調し得る、全国的にも希有な武器を持っていると言える。そして、それを教育に焼き直して言うのであれば、「自学自習」と言うことになるのであり、少なくとも、それが、工学部の教育の中でどのように実現されているのかということ

調できるに越したことはない。

しかし、残念ながら、表面的な項目平均値を見る限りにおいては、「予復習」や「進んだ読書」など、授業外で自分で行う学習は、他の大学と変わることなく、京大も低いレベルにあることが浮き彫りにされた。もちろん、それが低いことが、「自学自習」の理念を京大が実現できていないということに直結するということでもなく、大学に入ってから数年間では身に付くものではなくて、4年間かけてじっくりと要請されていくべきものという捉え方もできるわけで、例えば、表 2-2-13 で見たように、「学年」と「(29)興味が高まる」が相関が高かったりというあたりからも、それを表現し得る視点というのはまだいろいろなところに潜んでいるようにも思える。「自学自習」とは何か、「自由の学風」とは何かという議論もときどき積み重ねながら、その理念の下で、京大生が、工学部生が、どのように育っていくのがよいのか、そんな具体像を明らかにしつつ、それを的確に反映する授業アンケート項目を整備したり、アンケートをどう分析したらいいかという解析視点を精錬させていったりするなど、分析に関わるいくつかの課題が、「自己表現」という視点からアプローチされていくことになるであろう。

2 授業アンケートの今後の課題

(1) 授業アンケート実施上の課題

(a) 個人情報保護の課題

授業アンケートは、そのアンケート票そのもの及び分析の過程において、教員はもちろんのこと、学生のある種の個人的情報を含み込むことになる。授業アンケートを実施する以上、そこで得られた個人情報に関わるセキュリティをしっかりと保持していくということは、アンケートの内容や分析以上に重要なことである。そのリスク・マネジメントができないということは、授業アンケートを継続していけなくなる事態を容易に招来してしまうからである。

個人情報を保護するという意味では、特に、「自由記述」欄の扱いが難しい。そこに書かれたことが、場合によっては一人歩きするということが考えられるのである。近年は、Web などを利用した授業アンケートシステムも盛んに導入されているが、その辺のリスク・マネジメントがきちんとできるかどうか、現時点でしばしば問題とされている回答率の低さということよりも重大な課題となっていくと思われる。

しかし、授業アンケートは、本来は、後で触れるように、個人だけの中で埋もれさせるべきではない。周囲のファカルティと共に、教育談義を発展させるツールとしての意味合いがあって、そういう範囲では少なくとも公表すべきものであると思う。だが、公表することはリスクが高まるということでもあり、その辺の兼ね合いが難しい。

また、本授業アンケートでは、成績との相関を検討することになっているが、2005年4月より施行される個人情報保護法では、予め承諾を取っていないデータ利用は大幅に制限が加わることになっている。本調査では、マークシートに、授業アンケートの趣旨を詳細に記載してあり、アンケート結果を他の指標とマージして関連性の分析を深める旨断っているが、今後の授業アンケートでも、その点での工夫と配慮が要請されていくことになるであろう。

(b) 授業アンケートの継続のための体制作りと予算確保の課題

前節でも触れたように、京大の工学部の授業アンケートは、カリキュラムの見直しに利用するデータソースとして、ある範囲で継続されていく必要がある。しかし、授業アンケートは、教育成果のあるのデータを収集するツールとしては、比較的安価で、実施もし易いではあるが、アンケートのマークシート読み込みや、分析などを含めて、それなりの予算を必要とするということは言うまでもないことである。それだけに、京都大学内で、この種の授業アンケートに継続的に取り組んでいくためには、恒常的な組織体制作りと予算配分が実現していくことが望まれる。本授業アンケートは、京都大学高等教育研究開発推進センターのFD活動に、「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」による補助金が配分されたことをきっかけに立ち上がったことであるが、それは4年間のことであり、決して十分な体制とは言えない状況にある。この種のデータ収集は、必ずしも網羅的に、労力と資力と時間を注ぎ込んでやるべきものでもなく、適当なサンプリング(標本抽

出)と、トラッキング(追跡調査)と、そして、トライアングレーション(異方法によるデータ収集)が重要とされており、重要なポイントを外すことのない効率よい調査が継続できる体制作りを模索していくことが望まれていくことになるだろう。

(2) 授業アンケートとファカルティ・ディヴェロップメント

(a) FD 共同体形成のツールとして

授業アンケートは、授業に関わる情報を抽出するツールであるが、往々にしてやりっ放しでフィードバックされないままのことがある。今回の授業アンケートも、できる限りそういうことのないように、まずは、授業アンケート結果のフィードバック時に、担当教員の先生方から、結果を見ての感想やら、改善方針やらのデータを収集したいと思っている。

科目の評定平均値を見て寄せられる感想から、項目自体の修正やら、また、解釈の仕方やら、さらに、分析の視点まで得られることもあり得よう。特に、京大の授業アンケートで特徴的な「5つのキーワード等」のリストから、担当の先生方がどういうことが読み取れるのか、また、学生に取り上げられたキーワードと、教員が重要と思っているキーワード等との間にどれほどのズレがあるのか、この辺は、具体的な授業改善にもつなげられることであるし、カリキュラム的にも工学部で共有することが有意義ではないかと思われる。したがって、敢えて、キーワード等に関しては、すべてのものを取り上げて本速報版にも前節に掲載した次第である。

いずれにしても、この授業アンケートを通じて、工学部内に、各学科内に、教育に関わるコミュニケーションが巻き起こっていくことが重要であって、キーワードを通して、科目に関わる議論を深めたり、あるいは、評定平均値に基づいて、難しいといった評判の科目であれば、演習を並行してカリキュラムに新たに組み込むとか、二つの講義に分割するとか、あるいは、ティーム・ティーチングなどの共同体勢にチャレンジしてみるとか、いくつかの工夫を生み出すことにつなげていくことも可能であろう。

そのようなコミュニケーションを通じて、個々の教員の周りに、お互いにある種の共通の価値を分かち持った「実践共同体 (Community of Practice)」が形成されていくことが、まさに、「ファカルティ・ディヴェロップメント (FD)」そのものという見方をすることもできるのである。すなわち、そのような FD 共同体形成のためのツールとして、授業アンケート結果はどう活用していけるのか、それを大学教育の実践の中で模索していくことが、授業アンケートを実施する以上、避けて通れない課題であると思われる。

(b) 学生参加の要件

京大では、教員と学生の「交流会」が立ち上がり、学生と共に、京大の教育を考えていこうという機運が昨年度より芽生えてきている。授業アンケートも、そういう意味では、決して、教員だけのものではなく、それに回答してくれている学生諸君はもちろんのこと、アンケート自体に、学生が加わるということも既にいくつかの大学では行われていることである。

そのような授業アンケートの実施面における学生参画のみならず、実は、授業アンケートを授業時間内に実施するということに対するアカウントビリティをどう果たしていくべきかという課題もある。本アンケートのマークシートの趣旨文の中に、「この学習の降り

返りが、皆さんご自身の今後の学びの深まりにつながればと思います。」と記したように、授業アンケートへの回答は、1 学期間のその科目の学習の貴重な「振り返り」の時間であって、単なるアンケートへの協力と言うことではないとみなしたいのである。つまり、あくまで授業の一環として、学生の学習の振り返りをもって終了することの、教育上の意義を強調できればということなのである。

おそらく、この趣旨を徹底していくのは、はなはだ困難であると思われるし、本当に振り返りを強調するのであれば、例えば、試験を最後から 2 週目に実施して、最終週には、試験やレポートなどを返却して、その 1 学期の全ての学習を振り返ると共に、今後の学習計画に結び付けてもらうというのが最適であろうと思われるが、現実にはそれも困難な場合が少なくないであろう。ということで、現在の授業の背景の中で、授業アンケートを学生の学習の振り返りにつなげていくための何らかの方策、あるいは、アンケートの質問の仕方の工夫など、できる範囲で工夫の余地はまだいくつか残っているようにも思われる。

いずれにしても、授業は、教師だけでは決してできるものではなく、教師と学生が共に作り上げていくという理念に沿って、授業アンケートのあり方を、両者の立場が歩み寄って議論し、改善していくことが肝要であろう。